

平成25年度青森県臨床内科医学会 弘前大会

日時：平成26年3月15日（土）

場所：ベストウェスタンホテルニューシティ弘前3階アメジスト

【特別講演2】 17:50～18:50

座長：弘前大学名誉教授 弘前市医師会健診センター 所長 中村光男先生

「管見医学史 ～フィラデルフィアの窓から～」

公益財団法人 日本膵臓病研究財団 理事長 竹内 正先生

只今は、大変丁寧なご紹介をいただきまして恐縮に存じます。今迄いろんなことをやってきましたが過ぎ
てみますと、そんなに苦勞もしないで楽しくやってきたような気がします。この度は、このような機会を
青森県臨床内科医学会弘前大会でお招きいただき、大変光榮に存じております。今日の講演題名に管見と
いう名詞を用いたのですが、管見というのは、細い管から見るわけですから、あまり視野が広くないとか、
それから解像力があまり良くないとかで、この講演が雑な医学史観になるかもしれませんけれども、何か
感じていただければよろしいかと思えます。それとですね、管見という言葉は字引を引きますと、かなり
古い言葉らしいですね。中国で使っていたようです。私がそれを知ったのは膵臓学会で、ある先生が膵癌
の臨床管見という表題で会長講演をされました。ですから、余り使われている言葉じゃないようですが、
しかし、この何年か、毎週使われているのです。「週刊新潮」を読んだことございませんでしょうか。そ
のグラビヤページに管見妄語という題で藤原正彦さんが毎週書いています。2～3年分をまとめて一冊の
本になっています。そもそもこの人は、数学者なのです。アメリカに3年留学して、帰ってきて、その後、
イギリスに教授として招待され、1年間家族と滞在した。『若き数学者のアメリカ』とか『はるかなるケ
ンブリッジ』として本になっています。数学の人というのは、素晴らしい頭を持っているんだと思いま
す。すでに藤原正彦さんについては『国家の品格』というのを出版して、有名になりました。ベストセラ
ーになった。この人の父上は新田次郎さんです。ところで、新田次郎さんは、青森と関係のある人です。
『八甲田山死の彷徨』を書いて有名になりました。この人も本職は文筆家、作家じゃないのです。気象

台の所長さんでした。若い時は富士山の气象台にいて、山頂で冬山をすごした経験のある人です。新田次郎さんの奥さんの藤原ていさんも文才があって、まさに文才の一家ですね。新田次郎さんはペンネームで、本名は藤原寛人さんです。その辺を、今日の話は雑談が多いですから、あまり真剣にならないでゆっくり聴いてください。

さて、何故フィラデルフィアの窓からかといいますと、私、若い時にフィラデルフィアに2年いたのです。そこのペンシルベニア大学医学部生化学教室に、国立がんセンターから出張させてもらいました。フィラデルフィアはアメリカの歴史の上で、とくに医学について興味のある街でした。ここを足場に周辺の大学、病院の歴史を管見したのが、このたびの講演となりました。

1700年からアメリカの医学史は始まります。**Philadelphia General Hospital(PGH)**はアメリカでは一番古い公立の病院なのです。市が作った病院で、**1732年**に創られ、多くのドクターや研究者を養成して、多くの業績を残したところではありますが、**1979年**、経営上の理由から遂に約**250年**の歴史が閉じられました。その次に古いのが**1740年**、ベンジャミン・フランクリンがつくった **University of Pennsylvania** ペンシルベニア大学(ペン大)です。まだその時には医学部は無かったのです。その次に**1751年**にフィラデルフィアにアメリカで最初の病院ができました。**Pennsylvania Hospital** ペンシルベニアホスピタルといひまして、これもベンジャミン・フランクリンによる創立で、アメリカで一番古い私立の病院です。現在、**200**数十年続いており、ペンシルベニア大学病院の関連病院です。それからその次に**1765年**、ペンシルベニア大学(ペン大)に医学部が出来たのです。これがアメリカで最初のメディカルスクールです。アメリカ独立宣言よりも古いのです。

その次の年代なりますと、**1800年代**、**1850年**にフィラデルフィアに **Woman's Medical college of Pennsylvania** ペンシルベニア女子医科大学ができた。そこに日本人の学生が入学していました。京子さん、旧姓西田京子(けいこ)さん。この人は青森県の出身です。小学校の頃、父親の仕事の関係で横浜に移住し、クリスチャンの女学校を卒業し、のち東京の女学校の英語の先生をしていました。同僚の絵画担当の岡見さんと結婚し、岡見さんのおかみさんになったのです。そのご主人はクリスチャンで、彼

女もクリスチャンでクエーカー教徒だった。そうしたら、そのコネクションでアメリカに行く事になったのです。岡見京子さんはフィラデルフィアに行き、そこにあるペンシルベニア女子医大に入学しました。岡見京子さんについては後にまたお話します。夫は新渡戸稲造と一足先にミシガンに行き、農業問題の研究をしたとのことでした。

1865年、南北戦争というのはアメリカにとっては歴史上大変なことで、この後先で、だいぶ物事が変わったのです。Johns Hopkins ジョンズ・ホプキンス大学ができたのは、アメリカの南北戦争でジョンズ・ホプキンスが大変なお金を儲けて、それを寄付をするから、理想的なアメリカの病院と大学をつくるように遺書を残されました。それで病院が着工して竣工したのに10年以上かかっていますね、12年。開院にはまた更に4年もかかっています。これは想像ですけれども、大金といえども、戦後の大金というのはインフレみたいで価値が下がるのではないかと思うのです。何とかして、また寄付を集めた。ある婦人から大金を頂いた時に条件をつけられました。男女共学にしないとだめだと。それから大学を出た人を医学部にとりなさい。要するにカレッジを出た人にとって、そしてメディカルスクールに入れる。そういうのが、この時にできちゃったのです。そのモデルがアメリカの医学教育の中で現在迄続いています。だから、レベルは高いのです。ところが、第1回の卒業生は18名、女性は3名しかいなかったのです。これがおもしろいのはですね、あまり経営の事は考えていないでしょ。その頃のアメリカは鷹揚だったですね。経営の事は度外視して、18名しか卒業させないし、3名は女性だったのです。この大学には **Big Four** ビッグフォーというのがあるのです。これは4人の偉人という意味なのです。ジョンズ・ホプキンスユニバーシティをつくった4人のことです。これには、オスラー(内科)がいて、それからハルステッド(外科)、それからウェルチ(病理)、ケリー(婦人科)といます。それからウェルチは病理と書いてありますが、あの頃は細菌学という範疇はなかったのです。細菌学の人みんな病理学になっています。細菌学という概念をつくったのはドイツのコッホです。野口英世のペン大の所属も病理学教室、実際はそのあと細菌学になるのです。それから **William Osler** ウィリアムオスラーの動向を調べますと、カナダの大学からペンシルベニア大学に来たのは1884年で、実は5年しか

いなかったんです。ペンシルベニア大学とフィラデルフィアゼネラルの両方にいたのですけれども、残した功績は大変なものです。ペン大にウィリアムオスラーという名前がずっと残っています。それから、彼は新しいジョンズホプキンスに呼ばれて行った。そこには14年ぐらいいた。その後、イギリスのオックスフォードから呼ばれて、そっちへ行かれた。終生ここで過ごして、70歳で亡くなっています。彼はもともとはイギリス人だったのです。お父さんの代にカナダに移住して、その大学を出てアメリカに来た。だからもともとアメリカ人というよりもイギリス人なのです。

その次はアメリカで、最も古い癌研究所、1884年の Memorial Sloan Kettering Cancer Center メモリアル・スローン・ケタリングキャンサーセンター。Memorial Hospital メモリアルホスピタルという、この病院を指すのです。このスローンという人とケタリングという人が大金を出してつくった。スローンさんというのは、GMの社長。GMというのはゼネラルモーターズ、その副社長が、ケタリング、この人は技術屋さんでした。この人達によってつくってできたのが、1884年。ここに日本人の研究者がおられました。PhDの杉浦兼松さん。恐らく癌の化学療法の研究をやった人は、この人の名前を知らない人はいないし、みんなお世話になったのです。

1900年代になって、Simon Flexner サイモン・フレクスナーペンシルベニア大学病理教授のことです。野口英世の先生で、フィリピンで、アメリカ兵がかなり赤痢になって、その原因とか病原菌を調べるために行った帰りに東大の伝研に寄った。その時に北里柴三郎と話したのですけれども、北里先生はコッホの弟子でドイツ語はできるけれども、英語はできない。そこに野口がいたものですから、通訳をしてもらった。それで何かの拍子に、まあ儀礼的な言葉を残したのです。「もし、アメリカに来たら私のところに寄れよ。」という事ぐらい言っただけらしい。それを、インビテーションを受けたと思ったんですね。サイモン・フレクスナーは、恐らく1900年の夏ぐらいに伝研に行っているのです。ところがフレクスナー自身はジョンズホプキンスからペンシルベニア大学に赴任したのは、その1900年の初めに赴任しています。地球をひと回りして、戻った頃に手紙が来て、野口が「行く」というので、びっくりした。野口がフィラデルフィアに行ったのは1900年の終り、大晦日だということですね。だから

ら、行ったのはいいのだけれども、フレクスナーは研究の準備は全くできていなかった。赴任したばかりですからお金もなかった。困ってですね、フレクスナーは同僚のミッチェル教授に、「ちょっと金を出してやってくれないか」というので、野口にポケットマネーを出してもらって、それで蛇毒の研究を始めたのですね。

1900年というのはいろんな事がありました。これは目に触れるだけでもたくさんあります。日本では吉岡彌生さんが、21歳の時に医師の免許をとっています。あの頃は要するに国家試験といっても、内務省の検定試験ですから、多くの人は割とうまくとれた。29歳のときに東京女医学校を設立しました。女性が、社会的に自立するには、経済力がなければいけないというのが、彼女のモットーのようでした。それには医師になるのが一番いいということでした。その翌年の1901年にアメリカではRockefellerロックフェラー研究所ができて、大学になった。この大学には、もう既に、昨年2013年まで、23人のノーベル賞受賞者がいます。ここでちょっと例をひきたいのですが、ペイトン・ラウスという人がここで発癌ウィルスの研究をやりまして、実にかんばって87歳でノーベル賞をもらっているのです。何回か推薦されて、55年経ってからやっともらった。しかし、本当はですね、藤波鑑(アキラ)さんが東大の病理にいて、アヒルとか鶏の肉腫がウィルスから由来するという事を言いだして、なかなか認められなかった。遂に彼は、わりと気の弱い人で、主張を余りしなかったのか。ある時は、藤波さんはラウスと一緒に主張はしたのですけれども、悲しいことに藤波さんのほうが早く亡くなっているのです。ノーベル賞は死んじやうとももらえないのです。もらったのはやはり87歳のラウスがもらった。今から考えると、ウィルスで発癌するというのは、当たり前と言うか、不思議じゃないんですね。あの頃は、それは絶対に許されない思想だったようです。東大の病理学教室というのはドイツに留学した人が多いものですから、刺激説が強いのです。コールタールを塗って癌を作ったとか、バターイエローで癌を作ったとか、そういうことなんです。そこに微生物とか、何かは出て来ない。しかし、世の中は変わってきますけれども、そういう微生物かなんかが出す化学物質、その化学発癌ということもありますからね。だから刺激説に基づいた化学発癌以外は認められないという立場の人たちは非常に困ったです

ね。

その次は、1904年、サイモン・フレクスナーがロックフェラーの研究所に移って、その後、所長になった。野口英世は副所長になった。その数年前は彼は週に7ドルか8ドル貰っていたのに、ロックフェラーに行ってからその20～30倍貰ったとのこと。

1910年に Abraham Flexner アブラハム・フレクスナーという人がいまして、彼は野口の先生の、サイモン・フレクスナーの3つか4つ違う弟さんです。この人は医者じゃありませんけれども、アメリカ医学教育の改革者で。フレクスナーレポートという非常に厚いレポートを出したのです。これによって、アメリカの医学がひっくり返るくらいのことになったのです。あの頃は日本流で言えば雨後の竹の子と言われるくらい、医学校ができて、開業医さんもみんなそこで教授になって、学生に教えて自宅で患者を診てという様なシステムになり富を得たらしいのですが、それを改革したのです。医師の数も当時はかなり多かったのが半分以下になった。医科大学が3分の1になった。というようなことで、フレクスナーレポートというのは、有名です。2010年で100年目になります。アメリカとヨーロッパはフレクスナーレポートの記念事業をやったのです。100年祭。私の調べた限りでは、日本医学教育学会がフレクスナーレポートの100年記念の事業をやったとか、そういうのがなさそうですね。今やっている日本の医学教育の手法というのは大体フレクスナーレポート前後からの人たちがやったことを引き継いでやっているんです。

次に余談が出ています。ニューヨークの日本人。野口英世がいたし、高峰譲吉がいた。メモリアルホスピタルの杉浦さん、星一さんという人もいた。この人達がしょっちゅう会って、飲んで交歓をしていたらしい。高峰譲吉さん、これもご存知ですね。タカジアスターゼで有名だし、アドレナリンの抽出、合成で世界的に有名です。但し彼はノーベル賞をもらってもいいのですけれども、実業家だったものだからもらっていないのですね。高峰はアドレナリンという名前を付けた。そのあとアメリカでは、エピネフリンという言葉を使い始めた。それでクレームを日本の方からつけてね、そもそも見つけたのは、高峰譲吉が見つくてアドレナリンというネーミングで通用しているのに、何で急にエピネフリンか

というので、ねじこんだ。又アドレナリンになっているかもしれません。それから杉浦先生、この人は後でまたお話ができます。星一さん、この人は、実業家なんですね。星胃腸薬を作ってひと頃、日本ではかなり売れた。その後、星薬科大学をつくったのですね。息子さんが星新一という人で、東大の農芸化学の出身なのですが、むしろ医学系の事に非常に興味を持っており、SFの作家として有名な人です。2～3年前に亡くなったのですけれども、実にいろんな事を、今みたいなニューヨークの日本人の事も書いているし、医学者の歴史を調べるには、非常にもってこいの事を書いています。

これが **William Penn** ウィリアム・ペンです。この人の銅像はフィラデルフィアのシティホールが一番上にたっています。このように一番上に立っているものですから、フィラデルフィアのどこにいてもよく見えるわけです。彼は、もともとイギリスから来たアイルランドの人なのです。移民の1人でペンシルベニアに上陸した。土着民から土地を買ってそれをペンシルベニア州にしたのです。Pennsylvania というのは Penn の森という意味です。結局彼はアメリカで生まれたわけじゃないものだから、イギリスに帰って亡くなったのです。でも、功績は非常に大きい、アメリカに対してね。コロンブスが見つけた事以上に、文明を広げたわけですから。近年レーガンが大統領が、彼を名誉市民にした。それ以前に彼は市民じゃなかったのですね、恐らく。市民権があったかどうかわからないくらいの頃の事です。その次。ベンジャミン・フランクリンといいますと、日本の人がほとんど知っているのは、凧揚げをしている夕立の時、雷がそこから電気が伝わってくる、雷は電気だと証明したと、そういうので有名なんです、科学者であると同時に政治家であり、それから実業家でもあったのですね。アメリカでは最初に印刷もやったのです。印刷業。日刊新聞も出した。彼の業績はとくにペンシルベニア大学をつくったことでしょう。秋になると、大学の構内はこういう紅葉に囲まれて中々きれいなところです。ベンジャミン・フランクリンの銅像は、見るときと方向によって顔が違うのです。これは非常にいい顔ですけれども、怖い時もあるのですね。こういう広いところに彼がいて、街の人もやってきて。その次。これは、ベンジャミン・フランクリンがずっと向うの銅像ですけれども、その広場で、学生のカンファレンスをやっているのですね。これだけ広い公園の中に大学があるのです。その次。この公園のわきに、野口英世がいた建物があります。この3階に

いたのですけれども、私、探しに行ったのですが、なかなか、場所が見つからないというよりも、研究室でなくなっていて、事務所になっていてちょっとわかりませんでした。これはですね、今の野口がいたローガンホールに近いところに **Wister** ウィスターの研究所があります。ウィスター系のラットで有名ですが、ラットばかりではなくて、膀胱癌の腫瘍マーカーの CA 19-9 はここで作った。次です。これは医学部の基礎教室の玄関です。古いのですけれども、この時はかなり磨きたてられて、古い面影が余りない。その次。これはやはり 2001 年に中村光男先生と私が医学部の入口でとったものです。アーチの上に紋章があるんですよ。これはスコットランドの紋章でアザミの花なのです。ペンシルベニア大学というのは、スコットランドのエジンバラ大学からいろんなものを吸収してつくったので、その証拠です。先ほどの玄関の中に入りますと、いろんな教授の肖像画がたくさん並んでいるのです。割と目立つのはこの絵でした。アグニュークリニックの絵です。これは見たことのある人は多いと思います。日本の製薬会社の宣伝によく使ったのです。1889年に、描かれてありますけれども、ここの絵に描かれている全部の人の名前がわかっているのです。乳がんの麻酔をして手術をやっているところです。みんな白いコートを着て手術をやっていますね。このような状況に至るまで何年かかかっているのです。次は、おなじ絵描きさんの 17 年前の絵です。これはグロス教授が辞める時に描いたのです。この衣服をご覧になると、普通の洋服を着ながら手術をやっているのです。これが先ほどのように、きれいな白衣をつけることになるには、ある理由があるのですね。この間にリスターの消毒法というのが普及したのです。イギリスの、リスターが石炭酸を使ったのです。そうしたら、死亡率が劇的に少なくなったのです。それまでは腕や足を切断する手術の 40% が敗血症で死んだ。それが石炭酸(フェノール)を使ったらですね、ほとんどなくなってきた。又、産褥熱というのもなくなってきたのですね。昔は産婦人科の手術とか出産のときにドクターが血で汚れるのが派手に思ったんですね。血で汚れたまま、次のお産を取り上げるとか、手術をやるとか、そういうことで、産褥熱も結構多くて、死亡率が非常に多かった。リスターの消毒法ができてからそれは非常に少なくなったのですね。リスターというのはイギリス人で、そのために彼は大変な栄誉を受けました。高位の勲章やら、男爵とか子爵とか、貰ったのです。

その次、この絵を私は探しあててついに見つけた。これはサイモン・フレクスナーです。野口英世の先生で、実はこの絵を私は40何年前に留学した時に、ちらっと目にはいったんです。そして見たらサイモン・フレクスナーで、野口の先生だと一瞬で終わりだったのですが、やっぱり年を取ると昔が懐かしいもので、是非探そうと思って、実に1時間かかって探しあてた。そして45年ぶりに再会したのです。高さが3メートルぐらいあって、天井まであるのです。私のデジタルカメラじゃ収まらないので、ななめになっ
ていますけれども、撮った写真です。

これは、フィラデルフィアゼネラルホスピタルの正面の門です。ペンシルベニア大学と市内の大学病院の関連病院でした。ペンシルベニア大学はすぐ裏となりです。市内の大学病院のハーネマンとかジェファ
ーソンとか、テンプルさっきの女子医大、その4つがこの病院を利用していたのです。最近知ったのですが、ハーネマンという有名な大学がつぶれたのです。ハーネマンというのは200年近い歴史をもっている大学です。それから女子医大がつぶれていますから、残っているのは、ペンシルベニア大学とジェファ
ーソンのテンプルが残っているのです。というわけで、古いアメリカの医科大学もM&Aでつぶれるの
があります。

1983年に Philadelphia General Hospital の「誕生と終末」というのを日本語で小冊子に書いたの
ですが、アメリカ人の友達が見つけて、「お前、これを英語にして是非送れ」と言うので、フィラデルフ
ィアの内科医会に送りました。この小冊子がそのオスラー記念室にたくさん置いてありました。

これが私の研究室があったところで、この2階が全部。ペン大の生化学教室の分室になっていました。
研究室の中での私。これは私の先生。このフィラデルフィアゼネラルの病院の中に、オスラーの記念館
があり、解剖台が保存してありました。アメリカは歴史の浅い国ですからその人の功績を町や道に名前を
残すというのが、行われています。フィラデルフィアゼネラルホスピタルの前の道、非常に広い道があり
ました。それはキューリーアベニューと言っています。マダムキューリーの、従弟がこの病院の放射線の
部長をやっていたので、彼女がパリからラジウムを持って来て、寄附した。そして子宮がんの治療を
やったという記録があります。また、オスラーサークルというのが、病院の敷地内にあります。そうい

名前を残すというのはアメリカのいいところですね。オスラーが使った解剖台ですが大理石でできておりこの上で何百人かの解剖をやった。左の方に壁画が描いてありますけれども、有名な絵です。これが先ほどの壁画の絵です。その中で座っているのが、オスラーです。この患者は恐らく、結核だと思いますけれども、あの頃の患者という、多くが結核だといいますね。オスラーのことで、臨床で必要なのは、オスラー病とか、オスラーの結節とか、オスラー症候群というのがあります。ちょっと紛らわしいからまとめてみました。オスラー病というのは、遺伝性出血性毛細血管拡張、これはまれにあります。内視鏡のとき、粘膜の毛細血管拡張の病変に傷をつけますと出血します。オスラー結節、これは循環器の人は知っているかもしれません。感染性心内膜炎にみられる指先の疼痛を伴う小結節です。それからオスラー症候群、私は消化器だから、診たことがあります。可動性胆石が胆嚢と、総胆管に移動し、元に戻ったりする事によって、胆汁の排泄が間欠的に妨げられて黄疸がでたり、引っ込んだり、熱が出たり繰り返す。手術をやれば治ります。この本はヒストリーオブブロックリー(History of Blockley)と書いてありますが、ブロックリーというのは、フィラデルフィアゼネラルホスピタルの愛称なのですね。初めは村の名前だったのですが、ブロックリーというとフィラデルフィアゼネラルの事を指すようになったのです。その本が1929年に出た、相当厚い本で、コピーを多少とってきました。その中に、よく引用されます、オスラーセミナーの写真です。オスラー先生、恐らくこれは彼が37、38歳の時のころです。この2年後には彼はジョンズ・ホプキンスに赴任しています。この歴史ある病院の経営が悪くなりまして、1977年に閉鎖されました。その後、フィラデルフィアゼネラルの敷地の相当広いのが残されました。そのあとに、ペンシルベニア大学のメディカルセンターができたのです。

次にこれがジョンズ・ホプキンスのビッグフォーと呼ばれた偉大なる4人。オスラーが一番有名でしょう。病理のウェルチ、産婦人科のケリーさん、外科のハルステッド。オスラーはこの時、幾つだと思いませんか？ 彼は35歳でペンシルベニア大学の教授なり、39歳で、ジョンズ・ホプキンスに行ったんです。それでもこの4人の中では彼が一番年長でした。それ位の年の人がジョンズ・ホプキンスの病院を担ったのです。一番遅くまでこの病院に勤めたのは、ウェルチさん。今も病院に行きますと、ウェルチ記念ホ

ールというのがあって、この絵はそこに飾ってあります。彼の名はウエルチ菌 *Clostridium welchii* としてよく知られています。

さて、これは再び岡見さんの話。この方は大変な美人であったと記録には書いてあります。インドの人と、バングラデシュの人と一緒に撮っています。1885年に撮っていますが、この年に卒業した彼女26歳。彼女の行った女子医大。ここの建物に書いてあるのは、ちょっと読みにくいんですけども、*Woman's Medical College of Pennsylvania* と書いてあります。これはやがて、男女共学になり、M&Aで他校と併合して実体はなくなりました。これがスローンケタリングがん研究所の杉浦さんの写真です。コロンビア大学で PhD を貰って、癌研究所に入ってきた人です。この癌研究所も癌ばかりやっているわけではなくて、肝臓の酵素で大事ないわゆるGOT, GPTですね。あれを見つけたのはこの研究所です。私の先生の織田敏次先生も1958 - 1969、ここで肝酵素の研究をされました。

Frank Brooks 先生と William Chey ウィリアム・チエイ先生この二人が、1973年に世界で初めて消化管ホルモンシンポジウムをニューヨーク州のロチェスターで開催されました。その時、私、呼ばれて行ったのです。日本の旗がでていますが、日本からは演題は何もなかった。その前の日にですね、インスリンのRIAで有名なロサリン・ヤローさんの研究室に用事があって行ったのです。ヤローさんの机の上に写真がありますが、当時の上司のバースンの写真です。バースンが亡くなって、1年少し経っている頃でした。これがヤローさんからいただいた、バースンの写真です。その次、これは彼女の研究室。こういうなんて言うことのない研究室からノーベル賞が生まれた。彼女は2011年に90歳で亡くなりました。

次は、アブラハム・フレクスナによるフレキシナー・レポートです。その次。アブラハムの兄のサイモン・フレクスナーと野口です。この写真は非常にいい写真で、私の好きな写真の一つです。その次。これは野口英世の猪苗代の家にある絵です。その次。これは野口の奥さん、ミセスマリー。野口が亡くなってから、彼女は野口が残した年金やパテントの代金を猪苗代の野口の姉に、毎年送ったとのことでした。

ニューヨークの中心から電車で30分、ウッドローン駅から2～3分のところに大きな墓地があります。中に入りますと、公園みたいで、墓地という感じではあまりないですね。その一角に野口の墓石がありま

した。ここにヒデオ・ノグチ、ミセス・マリー・ノグチと書いて奥さんと一緒にいます。この墓石の高さは私よりも高く、大きな自然石です。ロックフェラーの研究所がこのような立派なお墓を作ってくれたのですね。これは野口の筆跡ですが、ご覧になってどうでしょうか。今のアメリカ人でこういう立派な字を書ける人はいないです。

日本の女性の医師の歴史。シーボルトの娘が一番最初だというのですが、荻野吟子がいて内務省医術開業試験、女医第1号です。岡見さんはペンシルベニア女子医大を出て、MDを貰っているから日本ではフリーパスで医師になれた。吉岡彌生さんは開業試験を受けて27人目の女医だったのです。さて、一番下に去年になりますが、アーディス・ディー・フープンという女医さんがアメリカで168回目のアメリカ医師会のプレジデントになった。正しくは内科医師会のプレジデントになった。これは毎年変わるらしいんですよ。今迄女医さんがプレジデントになったのは3人目だそうです。でも、アメリカの医師会も変わってきますよ。というわけで日本医師会も会長さんが女医さんがなるかもしれませんね。次。これがアーディス・ディー・フープンです。68歳、がんばっていますね。臨床ももちろんだけれども、いろんな、エイズのことや、第一線で活躍した人です。次。ご存知の日野原先生がでてきました。次。日野原先生がまだ若い頃、72歳。お元気ですね。今102歳。次、ここにおられるのは建部先生と山形先生、小泉先生、東北大学の人たち。一応みんな臍臓をやっているものだから、臍臓学会のパーティで撮ったものです。次。これが後藤先生と演者にブルックス先生という、さっきちょっと出ていましたけれども、ブルックス先生がアメリカ臍臓学会をつくる立役者だったのです。

その次、これは余談中の余談で好評だったものだから、もう一回出します。serendipity セレンディピティという言葉、これがだんだんはやっています。科学者の間でね。あてにしないものを偶然に発見する能力。要するにジャンクストアに行って、掘り出し物が上手だとか、目利きがいいとか、古道具屋に行っているものを見つけてくる。そのために勘とか、直感とか、知識の集積が必要なこともある。研究においてはですね、やっぱりこれも重要な能力だということですね。みなこれは駄目だと捨てないで、失敗が成功につながることも結構あります。例でね、コロンブスがアメリカ大陸を発見したのは、セレンディピティ

かどうか、アメリカ人はこれをよく引用するんだそうです。だけれども、そうじゃないんじゃないかという意見もあります。この意味からしてね、コロンブスがたまたま、どこかの大陸にぶつかった。インドに行こうと思ったんですね。そこで考えたら、どうもインドではなくて新大陸であったというのですね。それがセレンディピティ。あとは・・・の発想ですね。バーソン・ヤローは本当はインスリン抗体を測ろうと思ったらしいけれども、うまくいかなくて、インスリンそのものを測っていたという、結局インスリン測定法になった。最後に、中村光男先生が第42回日本膵臓学会を弘前でやりました。2011年です。日本中から多くの参加者があり、非常ににぎにぎしく大変立派でした。その時は大変お世話になりました。今この席をお借りしてお礼を申し上げます。時間がちょっと過ぎまして申し訳ありません。どうもありがとうございました。